

齋藤孝著「就職力 就活は一日二〇〇ページの読書から始めなさい！」毎日新聞社 2011年6月30日刊を読む

I. 就職力 —就活は一日二〇〇ページの読書から始めなさい—

1. (1) (1) 就職氷河期が深刻化する影響を受けて、私はいよいよ授業で就職力を高めるトレーニングを増やしている。
 - (2) ①一年生の授業では、「活字力トレーニング」として、週5冊の読書(新書中心)をノルマとして課している。
 - ②これまでは、週2、3冊だったから倍増だ。
 - (3) ①それもこれも、卒業時に職に就いてほしいという親心的教師心からだ。
 - ②「嫌われようとも、なんとしても活字力をつけさせる！」という不退転の決意で臨んでいる。
 - ③それほど就職状況は厳しいのだ。
2. (1) ①先日、大企業の幹部に「どんな大学生を採用したいですか？」と質問した。いつも私がしている質問だ。
 - ②答えは、「ヴァイタリティのある人間」だった。そのヴァイタリティの中身を聞いていくと、元気ということだけでなく、「人と同じことばかり言う人が多い。
 - ③自分の言葉で話せる人がほしい」ということだった。
- (2) ただの元気なら、大学三年生は、たいがい元気だ。大学生におけるヴァイタリティは、知的好奇心、行動力、判断力、コミュニケーション力などが融合した総合的な力だ。
- (3) ①活字力は、「認識力、コミュニケーション力を高める基礎」だ。
 - ②そして、「読んだ本を人に話すことで定着」する。
3. (1) ①「人間力がつく生活とは？」というテーマと就職力は、同じことだ。
 - ②知的な創造力のある、人柄のいい人と組んで仕事がしたいのは、だれでも同じだ。「人柄がいい」ことは大切だ。しかし、それは学生生活で磨き抜いた人柄でありたい。
 - ③「成熟」ということに真剣に向き合おう。
 - 「成熟」こそが、就職で求められる力だ。
- (2) ①早めに仕上がった大人っぽい人ということではない。状況理解力にすぐれ、対策を考えられ、ずっと体が動き、場を明るくクリエイティブにできる人。
 - ②これが私の成熟した人のイメージだ。だから成熟=若々しさでもある。

③東日本大震災の日本では、いよいよヴァイタリティにあふれた成熟した若者が求められている。

(3)①企業でもどこでも、若々しい成熟した人がほしくてたまらない。

でも、他人と同じようなことを言う人ばかりで参っているのが現状だ。

②氷河期の今こそ、人間力のある人物が求められている。

③これをむしろいい機会として捉え、自分からチャンスをつかみとっていこう！

II. 一冊も本を持たずに出かけるのはありえない

1. (1)①本を一冊持っているだけで、一日の時間は格段に濃密になる。

②待ち合わせや電車移動などで、少しでも読み進めるといい。読んでいる時間が、未来の自分への投資だと思えば、空き時間もまた楽しくなる。

③携帯電話やスマートフォンを始終触っているのはよろしくない。生産性のないゲームをしたり、瞬間的に流れては消える情報を追っかけている時間は、財布の中から小銭をジャラジャラと外にこぼし続けているようなものだ。

(2)①こぼした小銭はもう返ってこない。時間をつぶしていると、そうになってしまう。まず時間をつぶすという感覚を捨ててほしい。大学生に、つぶせる時間などない。

②空いている時間を、有効な投資に使い切る発想で毎日に臨もう。そのために最も手軽で便利なのが、本なのだ。

③僕はいつも学生に、「いま本を持っているか？」と訊く。「一冊も持っていません」という学生には、言葉をなくしてしまう。

(3)①かばんの中に一冊の本も入れておかない学生に、僕たち大学教授が教えられるものは、何もないような気がする。「持っていなさい！」と怒る気にもなれない。

②出歩くときに何か本を持っていくという発想を、最初から持っていない学生に、その必要性を説くのは難しい。

③教養レベルの時点で、本を持っている学生と相当な開きがあると思われるから、「あ…そうなの」ぐらいしか返事ができないのだ。

2. あえて言う。

(1)一冊も本を持ち歩かない大学生は、本質というものを知る機会を得られない、とても残念な人だ。

①本質を知るということは、学問をする者のいちばんの目的であり、喜びだ。

②森羅万象を司っている本質と出会うには、本を読んだり、授業を聞いたり、真面目にノートをとって、自ら学問を深めるしかない。

③あのアインシュタインが $E = mc^2$ という宇宙の原理をつかんだのは、天才的な才能もあっただろう。しかし、実際は、物理学を深めることに世界一努力したから、究極の定理にたど

り着けたのだ。

(2)本質をつかむというのは、ある意味で技の一つだ。

①哲学や金融工学など難解な学問の全体を眺めることで、核にある本質をグッとつかむ。

②この技は仕事にも応用できる。

③大きな予算を投じたプロジェクトの計画立案を任されたとき「このプランがこのプロジェクトの本質だな」と、気づくことができる。

(3)大学生が本質をつかむ技を身につけるには、本を読むのが最も確実性の高い方法だ。

①勘違いしてはいけないが、知識量を増やすためだけに本を読めと言っているのではない。

②本質をつかむ技というのは、クイズ問題を解くような記憶能力とは根本的に違う。

③日常のさりげない瞬間に、ふっと出てくるものだ。

3. (1)①僕の好きな話で、昭和初期の文豪・幸田露伴の語った妻の思い出話がある。

②日本料理のととても上手な奥さんで、あるとき露伴は、当時はまだ珍しい西洋料理を食べさせた。

③すると、ほんのちょっと食べただけで奥さんは「西洋料理は、だいたいわかりました」と言う。いわく「肝心なのは、ソースなのですね」と。

(2)①料理は世界中どこでも、煮るなり焼くなり、調理法にそんなに多くのバリエーションはない。

②けれど西洋料理には日本料理にはない、ソースで味を工夫するという文化があった。

③本質をつかむ技を持っている人は、こういう発見をわずかな時間でできるのだ。

(3)言い換えるなら、一を聞いて一〇を理解する、勘のいい人。

「こいつは話が早いな」とか「外してこないヤツだ」と大人から思われる学生は、すぐ社会に出ても通用してしまう可能性を、すでに秘めている。

P150 ~ 153

Ⅲ. 認識力を上げるにはハサミとペンを使う

1. (1)活字力を伸ばすには、コメントをつけ続けるといい。

お薦めするのは、新聞でも雑誌でも自分の注目した記事をハサミで切り抜き、ノートに貼り付けてコメントを記す方法だ。

(2)これは非常に効果的だ。記事を読み解く力と、意見を述べる力の両方を訓練できる。しかも実際に手を動かすから、楽しくて飽きない。僕の教えている学生にこの方法をやらせたら、「社会の動向がすごくクリアに感じられます！」と喜んでた。

報道されているニュースは、すべて受動的なものだ。

受けているだけでは、認識力が一方向にしか働かない。

(3)ニュースを読み、コメントを発信するという視点を持てば、認識力が多角的に働いてくる。自分が池上彰さんになったつもりで、ニュースに接してみるといい。

ニュースを知り、事件の構図を知り、自分からコメントを発することが、豊かな認識力を育む。

2. (1) コメントは、誰かの引用でも構わない。

大人は大学生に「自分の言葉を持て！」などと檄^{げき}を飛ばすけれど、「自分の言葉」なんていうものは、この世にほとんどない。

(2) どんな名言・金言でも、どこかから引用された、外の言葉だ。僕の知る限り、学者や会社経営者など、どんなに賢い人たちでも、自分の言葉を持っている人は、ほとんどいなかった。あるのは「自分の言葉のように語れる、外から来た言葉」だけだ。

(3) その言葉を使いこなすには、相当な訓練と学びが必要になる。無理して自分だけのオリジナルの言葉を見つけるよりも実践的だ。

外から来た言葉を、あたかも自分が生み出した言葉のように駆使する。

それが、より強い活字力へと繋がる。

3. (1) 新聞・雑誌の切り抜きにコメントをつけ続けると、認識力が蓄積される。

ノートにまとめることで、後で自分の思考の経過も確認できるし、レポートなどのちょっとした資料にも利用できる。

(2) 雑誌の本体を切り抜く必要はない。図書館で取ったコピーでもいい。一日三本以上とか、ノルマをつけるのもいいだろう。切り抜きコメントを一〇〇個も積み重ねると、活字力は相当アップしているだろうし、話題の引き出しも増えているはずだ。

「あのニュースについてどう思う？」と訊かれたとき、自分の意見をコメント風にサッと答えられる人は、思考の分厚い、下半身の強い人だと思われる。

(3) 近年、さまざまな場面でメディアリテラシーの重要性が問われている。ニュースを読み解く力だけではない。ニュースを読んで、自分がどう思うか。他のニュースと組み合わせて、どんな情報を導き出せるか。何を語るができるのか。そういった総合的な分析力のことを、メディアリテラシーという。

メディアリテラシーを鍛えたければ、まずハサミとペンと新品のノートを使いこなそう。

P205 ~ 207

<コメント>

コロナ禍で史上まれな就職難が予想される現在、「就職力」の重要性が再認識されている。3.11東日本大震災直後に出版された明治大学教授の齋藤孝先生の本著は実に参考になる。

2020年10月29日(木)